戯画化の方法

法音院大會

その漫画家はＳＮＳに漫画をあげていた。恐竜がデフォルメ化された目つきの悪い初老の男に理不尽に怒られ、それを世間一般的な「正論」でやっつけるといった具合のものだった。

その日は大安だった。漫画家は自宅であるマンションの一室に宅急便を騙る人物に押し入られ拘束された。

その押し入った人物と漫画家はお互いに知らなかった。特に関係も何もない。

その人物は男だった。渋谷に行けば数十秒で似たような人を見つけることができる顔をしている。

男はリュックから裁ちばさみを取り出した。漫画家が抵抗するので男ははさみを逆手に持ち鉄製の持ち手で殴打した。漫画家を失神した。後ろ手に縛られ、足はテーブルに括りつけられた。

そうして、男は漫画家の口を開け、その裁ちばさみで左の口の端から頬にかけて裂いた。

漫画家から鳥が撃たれた時のような声がした。男が同じように右の頬に裁ちばさみをあてがうと、また暴れたため強引に裂いた。皮膚が輪ゴムのようにちぎれた。

男はその裁ちばさみを捨て、リュックからカセットコンロを出した。

男は床に置いたコンロに火をつけ漫画家の顔を押し付けた。漫画家が抵抗したはずみでテレビのリモコンが押される。

運勢占いの陽気な音楽と共に漫画家は今日の自分の運勢が「超ラッキー」だというアナウンサーの声を聞いた。

そろそろというところで男は手を離した。漫画家は気絶した。

漫画家が気絶している間に男は漫画家のクローゼットにあったスーツを出し、顔にできた水ぶくれや溶けた部分をこそぎ落さないよう慎重に着せ替えた。

リュックから厚紙でできた吹き出しを取り出す。昨日の作品と同じセリフが書かれていた。

漫画家は目覚めるとその吹き出しを持たされた。そのマンションの部屋だった場所はコマの中になった。吹き出しは厚紙ではなくなり、やわらかい物質になっていた。

男が吹き出しを言った。男は初老になっていた。

コマから抜け出そうとする漫画家へ初老の男の旧時代的な根性論と理不尽な責任の押し付けの吹き出しが浮かびつつ寄ってくる。

昨日の作品では恐竜による達観したような無責任な切り替えしがあった。漫画家は手にした吹き出しを見た。

その吹き出しは空白だった。三コマ目に移ってしまった。

しかし、初老の男は昨日の作品と同じように大きな汗マークと青筋を出しながら逆ギレをしていた。

四コマ目が始まった。漫画家の皮膚と水ぶくれが茶色に変色し、鱗状になった。コンロの五徳に押し付けられて抉れた唇から暴れた時に欠けた歯が見える。裂けた口のピンク色が褪せていく。

恐竜はどんな吹き出しも言えなかった。ただ「いいね」が増え続けていく。どんどんと拡散され続けていく。